（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　金　東熙

本論文は、朝鮮王朝中期の朱子学者李珥、号栗谷の（1）理気論（2）性心論（3）誠敬論からなるTrilogy思想を、体系的に分析したものである。大きく序文と本論三部・六章・十八節と結論より構成されている。

本論の第一部は、Trilogy 思想における理気思想の研究である。栗谷の理気論の核心的な命題として、“二つの原理”＝「理気元不相離」「理気実不相雑」と、原理を具現化した“三つの理論”＝「理気之妙」「理通而気局」「気発而理乗」をあげ、核心的な命題およびそれより派生した諸命題を存在論的次元（「未発」の次元）と宇宙論的次元（「已発」の次元）にわけて分析し、それを通して宇宙万物の存在根拠と変化の根底を明らかにする。

第二部は、性心思想の研究である。栗谷が理気論の“二つの原理”と“三つの理論”を性心論の考察に適用して、性と心の存在論的次元と宇宙論的次元から「人心道心：情と意」、「性：本然之性と気質之性」、「至善」と「中」の関係を考察したことを諸命題の精緻な分析総合によって解明する。

第三部は、誠敬思想の研究である。栗谷が理気-性心論に現れる“二つの原理”と“三つの理論”を誠敬論に応用し、誠と敬に関する諸命題を存在論的次元と宇宙論的次元から分析しつつ、Trilogy 思想のもつ対立的属性にしたがって「理－性－誠」と「気－心－敬」という二つの思想範疇を再構成したことを明らかにする。

結論では、本論の分析総合の研究過程を要約再検討し、研究のもつ意義や方法論上の限界を述べた上で、A. N. ホワイトヘッドの有機体思想との比較研究の可能性を展望する。

本論文の総じて評価すべきところは、よく栗谷思想の構造を解明したことである。栗谷思想は大きく（1）理気（2）性心（3）誠敬の三部門からなるとし、共通の“二つの原理”と“三つの理論”をもって、その三部門の思想構造すなわち（1）理気論＝マクロ理論、（2）性心論＝ミクロ理論、（3）誠敬論＝プラクシス理論であること（論文にいうTrilogy思想がこれである）を哲学的に説明し、それによって諸命題の意味を細部にいたるまで明らかにしている。

本論文には西洋哲学由来の概念を内容分析に多用し、また栗谷学を概念的に理想化する嫌いもあるが、栗谷のみならず、栗谷を基点として退渓や尤庵などの思想的意味を解明しており、高レベルの思想研究と評価することができる。著者には朝鮮朱子学史の全面的な解明を期待したい。

審査委員会は以上にもとづいて、本論文が博士（文学）の学位に値すると判断する。